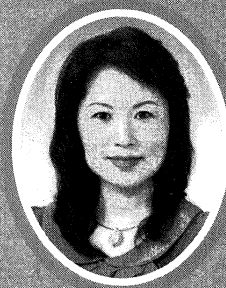


東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

## 【コラム】「勇敢な王子」と「ヘタレ王子」-グリム童話を考える?-

著者	大野 寿子
著者別名	ONO Hisako, OHNO Hisako
雑誌名	東洋通信
巻	47
号	12
ページ	4-10
発行年	2011
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00010968/">http://id.nii.ac.jp/1060/00010968/</a>

# オアシス



## 「勇敢な王子」と「ヘタレ王子」

— グリム童話を考える⑤ —

大野 寿子

最近、「ヘタレ」という語をよく耳にする。「腰ぬけ」「根性なし」「臆病者」「未熟者」等を意味する語のようで、「へたる」という動詞から来ているとも「屁垂れ」に由来するともいわれている。「グリム童話」の王子にはヘタレが多いですね。」このような指摘を、今年度の卒論ゼミ生から受け愕然とした。ちょっと前までは、他ならぬ「白馬に乗った金髪碧眼の麗しき王子様」のイメージソースの一つとなっていたのが、メルヒェンであり『グリム童話』ではなかったか。さらに筆者はこの指摘を受け、「童話の王子はなぜあんなに死体フエチなんですか」という、前年度の卒論ゼミ生の疑問をも思い出した。この二人のゼミ生が引き合いに出した王子こそ、グリム・メルヒェン第五三番〈KHM53〉「白雪姫」の王子であった。「死体フエチ」と「ヘタレ」との関連性にはやや疑問が残るが、『グリム童話』の「王子」の行動が、我々現代日本人の想像に反して「理想的ではな

い」という意味合いにおいて、二人のゼミ生の見解には相通ずるものがある。以下、『グリム童話』（第七版）の「ヘタレ王子」と、その反対の「ヘタつてない、勇敢な王子」について、当該学生達との会話を基に考えていく。<sup>③</sup>

\*

\*

\*

KHM53「白雪姫」(Sneewitchen)では、その美しさゆえに命を狙われた「白雪姫」という姫が、森に住む七人の小人の家で共同生活を営み、ママ母のこしらえた毒リングゴを食べて命を落とし、ガラスの棺に入れられる。そこに、どこからともなく「王子」がやって来て、姫を蘇生させ、二人はめでたく結婚するのである。ところで、白雪姫と王子との出会いの場面では、ガラスの棺に横たわる美しいまま朽ち果てない白雪姫を見つけた王子が、小人達にこう話しかける。

この棺を私に譲ってください。その代わりにあなた達には何でもほしいものをあげましょう。

小人達は、大切な棺を物と交換することを拒否し、結局無償で王子に譲ることとなる。ちなみに、同じセリフは、ドイツ語原文の意味を変えずに、以下のようにも訳しうる。

この棺を僕にちょうだい。その代わりに君たちに何でもほしいものあげるからさあ。

日本語をちよつと変えただけで、王子に甘ったれた印象が漂うこととなる。特に男性のセリフを翻訳する場合、一人称を「僕」とするのか「私」あるいは「俺」とするのか、丁寧な口調とするのか否か、すなわち、日本語訳で作り上げられる世界像によつて人物のキャラクターが変わってしまう。つまり翻訳とはまさに解釈なのである。ただし、いずれの翻訳にしても、王子が生身の女性ではなく死体に恋をしており、姫を物として扱っているという内実に変わりはない。王子のこのような死体フエチに着目した前述のゼミ生は、「フェティシズム」という、信仰形態であると共に愛情表現ともいえる人と神、あるいは人と人との関連性の一つのあり方に着目し、卒論を昨年度完成させた。王子は白雪姫の「美しさ」に惹かれたと表現すると聞こえはいいが、実際はこのように、彼女の「死体」の「美しさ」に

惹かれたのだから、「美しい」行動とはいいい難い。

\* \* \*

ところで日本でも有名なデイズニー・アニメーション映画『白雪姫』(Snow White and the Seven Dwarfs)では、白雪姫は王子のキスによつて目覚めることになっているが、その原作とされるKHM53「白雪姫」(第七版)の目覚めの場面は以下の通りである。

すると、「王子の」家来達が藪に足をとられて棺がゆれた。そのはずみで、白雪姫が食べた毒リンゴのかけらが彼女の喉からとびだした。白雪姫はほどなく目を開き、棺の蓋を持ち上げ起き上がった。生き返ったのだ。

白雪姫の一時的な死の原因は、どうもリンゴを喉に詰まらせたことにあり、なにも「毒」リンゴである必要などなかったようだ。また、デイズニー映画のロマンティックな王子のキスを想定する読者には、グリムの「白雪姫」のこの目覚めの場面は、いささか素っ気ないものに映るのではないか。というのも、王子は白雪姫の蘇生には直接貢献してはおらず、姫を蘇らせた立役者には値しない。たとえば、姫を救う王子なるものの存在が、KHM50「いばら姫」(Dornroschen)に登場する「勇敢な王子」のイメージでのみ想起されるとしたら、すなわち、いばら姫の眠る館を覆い隠した「いばらの生垣」の棘に引き裂かれ、痛ま

しい最期を遂げた数々の王子の言い伝えを聞きながらも、死を怖れず分け入ろうとした勇敢な王子の姿で想起されるとしたら、先の「白雪姫」の「勇敢でない王子」の言動が、「ヘタレ」に映っても仕方なからう。

ただし、たとえ勇敢であれヘタレであれ、運命は王子達に味方する。KHM53「白雪姫」の王子は、先に述べたようにさまざまの偶然が重なることで、白雪姫の蘇生に間接的に関わる事となる。また、KHM50「いばら姫」の王子は、その勇敢さが功を奏したのか、いばらの生垣に分け入ったときに、ちょうど姫への呪いから一〇〇年の月日が経過する。美しい花が咲き始め、生垣の方から王子に道を開け、彼を通してくれる。つまり王子は選ばれし者なのである。さらにこの「いばら姫」の場合には、目覚めのキスが待っている。主人公としてではなく、主人公を救いその配偶者になるべく、途中からある意味「都合よく」現われる王子は、「機械仕掛けの神」ならぬ「機械仕掛けの王子」として、あらゆる困難を解決する強運の持ち主でなければならぬのである。

\* \* \*

他の『グリム童話』にも、多くの王子が登場する。たとえば、近日公開予定のディズニー・アニメーション映画「塔の上のラプンツェル」の原作となった、KHM12「ラプンツェル」(Rapunzel)の王子は、名付け親である老婆(女魔法使い)によつて森の中の高い塔に閉じ込められた少女ラプンツェルの歌

声に心奪われる。呼びかけにより垂らされる彼女の長い髪の毛をつたって塔に上り、彼女と恋仲になるのである。ところが、恋は盲目とばかりに恋に突っ走った王子は、この女魔法使いによつて塔から突き落とされ、目に棘がささって本当に盲目になる。すでに塔を追われ、荒野でひっそりと暮らしていたラプンツェルに、艱難辛苦を乗り越えめぐり会ったこの王子の目は、彼女の涙のおかげで視力を快復し、その後一緒に暮らしてハッピーエンドとなる。このプロセスだけをみれば、たとえ盲目となつても、愛する少女を探す王子の勇敢さが際立つであろう。ただし、王子と再会したとき、ラプンツェルは王子の子を産んでいた。つまり、この勇敢な王子は、実は少々節操のない王子だったとも見受けられる。また、彼が塔から落とされる前、女魔法使いがすでに切り取ったラプンツェルの髪の毛をつたって塔に上がっている。そのときもう、ラプンツェルが塔から追いつたこの王子は、少なくともこの時点では、実のところ正常な判断力を欠いた「ヘタレ王子」であつたともいえるのではないか。このように、魅力的な女性に心奪われた『グリム童話』の王子達は、ときには「勇敢な王子」、ときには「ヘタレ王子」として、人間らしい側面を見せる。そして、その人間らしい王子の行動の陰に女ありなのである。

ただし、王子が主人公の場合、多くは「勇敢で賢く優しく素直」であることが求められる。さらに、王子が三人兄弟だった

場合には、その勇敢で賢い王子を演じるのは決まって末っ子なのである。KHM57「金の鳥」(Der goldene Vogel)では、キツネの助言に耳を貸さない一番目や二番目の傲慢な王子ではなく、助言に素直に従った優しい三番目の王子だけが、困難を克服し「金の馬」と「金の城の乙女」を得る。ただしその後、せっかくの助言を忘れて禁則を犯し、兄によって井戸に落とされるが、またもやキツネに甘やかされるが如く助けられ、最終的に先の乙女とハッピーエンドを迎える。このように、主人公である勇敢な王子も、どこか抜けており、援助者であるキツネに常に甘やかされている意味で、やはり「ヘタレ」な部分をも持ち合わせているといえよう。

\* \* \*

『グリム童話』の王子にはヘタレが多いですね」といった上述のゼミ生は、今年度まさにこの「王子像」について卒論を執筆する際に、筆者の授業受講生を対象に、「王子」のイメージに関するアンケート調査を行った。その結果、最も多かった「王子」のイメージは「白馬」(一三五票)であり、次に「白タイツ」(八〇票)、「優しい」(七四票)、「かっこいい」(六三票)、「城」(五七票)、「金髪」(五五票)と続いたという。このような現代日本人の、特に女性から見た「王子」像のイメージソースに、『グリム童話』のような外国の伝承文芸のみならず、宝塚歌劇の男装の麗人や手塚治虫漫画『リボンの騎士』等の影響を指摘した当該学生は、「現代の日本人は「王子」ということばに、

「非現実の中にある憧れの対象」を見出していますね」といった。つまり、あるメルヒェンに登場する「王子」や事実在即した「王子」ではなく、実体のないイメージとしての「王子」像が、一人歩きしてしまっているというのである。考えればこれは、別に珍しいことではなからう。しかしながら、「スマートで金髪碧眼で勇敢で白馬にまたがった(あるいは白馬が似合う)」「憧れの対象としての王子像の陰に隠れてしまった、実はあまり勇敢でも賢くもない、ときにはへまもする『グリム童話』の「ヘタレ王子」の存在は、だからこそ興味をそえられるといえるのではないだろうか。主人公の姫君達でさえ、ときにはリングを喉に詰まらせたり、ときには見知らぬ王子との逢引を、名付け親の女魔法使いにうつかり話すというへまをやらかしてしまうのである(この場合、内緒にするという観念そのものがなかったのだが)。つまり、主人公の姫とて完璧な人間ではないのだ。そのような姫の伴侶として必要とされるのは、完全無欠のヒーローというよりはむしろ、不完全なところを補い合う、割れ鍋に綴じ蓋のような、どこか抜けたところも持っている人間味溢れる王子なのではないだろうか。それを「ヘタレ」というならば、この「ヘタレ」こそ、『グリム童話』の王子達に「愛すべき」キャラクター性を付与する重要な要素であると考えられよう。

\* \* \*

## 【後日談】

ようやく筆を置こうとしたこの期に及んで、「ヘタレ王子」という語それ自体が、若者言葉として「あり」なのか「なし」なのかを確かめてみたくなり、二〇一〇年度卒論ゼミ生を対象にミニアンケート調査を行った（二〇一一年一月二六日）。回答総数二〇のうち、「ヘタレ王子」という語が自分の言語感覚として「あり」だと答えた学生は一四名、「なし」だと答えた学生は六名であった。

「なし」とした理由には以下のものが挙がった。まず、「王子自体が素敵でプラスのイメージなので、ヘタレというマイナスイメージと王子とが合わない」と理由づけた学生が二名おり、ここに、完全無欠の王子像が現代日本に浸透している証言を得たといっても過言ではなからう。つまり、名詞の前に「ヘタレ」を置くことは可であるが、「王子」の形容に「ヘタレ」はそぐわないというのである。また、「ヘタレ単体で使用する方が多い」との理由で「なし」とした学生も二名おり、「ヘタレ」が、形容詞としてではなく、あだ名のような固有名詞として認識されていることを物語っている。さらに注目すべきは、「ヘタレ王子」ではなく「ヘタレな王子」ならば自分的には許せる」という意見であり（二名）、拙文題目も「勇敢な王子」と「ヘタレな王子」とするべきかと考えさせられた。ただし、これらはあくまでも「ヘタレ王子」という用語法に異議を唱えたものであり、「ヘタレ」という語そのものに関しては、二〇名全員が「わか

る」あるいは「使用する」とみなしていた。「新日本語」、さらにはそれをめぐる言語意識の揺れを示す事例として見るとおもしろい。

さらに興味深いことは、この「ヘタレ」という語が浸透しだしたきっかけは、日丸屋秀和の漫画『Axis powers ヘタリア』のヒットによるものではないかと考えた回答者が大変多かったことである（筆者も読んだことがある）。また、「ヘタレ〇〇」の例として、「ヘタレわんこ」等の動物の他に、「ヘタレ男子」「ヘタレサラリーマン」「ヘタレボクサー」「ヘタレ上司」等が挙がり、「ヘタレ」とは、男性の形容に使われることが多いのではといった意見が多数寄せられた。さらに筆者を驚かせた意見として、宮崎駿アニメ『ハウルの動く城』の主人公ハウルが、「ヘタレ王子」と理想的な王子の双方のイメージを兼ね備えたキャラクターだというのがあった。当該作品の金髪の魔法使いハウルは、主人公ソフィーを救うヒーローとして登場するが、髪の毛を金髪に染められなくなったことがきっかけで、自信を無くした他力本願な弱虫へと転じてしまう。しかしながら、戦火からソフィーを守るという使命感ゆえに「勇敢」な人間へと成長を遂げるのである。このプラスからマイナスへとイメージが転じ、さらにプラスへと変化するダイナミズムにこそ、「ヘタレ」の魅力があるというのである。ならば、「ヘタレ」とは常に、麗しく勇敢で有能であるという、いわば肉体的にも精神的にも頭腦的にも優れた男性像ありきで存在しうる特性といえる

のではない。すなわち、完全無欠な理想像の対極にあるとしても、あるいはそこには一歩及ばないが憎めないという特性を指し示すとしても、「ヘタレ」とは、「麗しく勇敢で有能」の反動あるいは反作用の一環として表れ出でた、草食系で装飾系の憎めない男性キャラクターなのかもしれない<sup>②</sup>。

さて、年度末も近づき我が卒論ゼミでは、次年度卒論ゼミ生（候補）にテーマ希望調査を行った。興味のあるもの、疑問に思うことなどを例年通り自由に書かせてみた。そこでまたやや怪しげな疑問を見つけてしまった。「いばら姫」といい「白雪姫」といい、王子はなぜ眠っている人間に惹かれるのでしょうか。王子研究は、どうやら次年度も続くようである。

#### 【注】

① グリム兄弟（ヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリム）が一八二二年に収集刊行した『子どもと家庭のためのメルヒェン集』（Kinder- und Hausmärchen）の日本での通称であり、KHMはその略称である。一八五七年刊行の第七版決定版まで、グリム兄弟生前に七回版を重ねている。決定版での総話数は、「メルヒェン」二〇一話（通し番号は二〇〇番まで）と「子どものための聖人伝」一〇話を合わせた計二一一話である。

② 「ヘタレ」は、「へたれる」の転成名詞の可能性もある。ただし、見出し語として「へたる」は、『日本国語大辞典』

第二版に載るが、「へたれる」はないようである。「へたれ」という語そのものについては【後日談】に譲り、ここはひとまず、新日本語ともいうべき今時の若者ことばに習うこととする。

③ 以下、特にデータに関しては、筆者指導による二つの卒業論文を一部参考にさせていただいた。東洋大学文学部日本文学文化学科二〇〇九年度卒業生鷲田准也さん（題目「信仰と愛情のフェティシズム―古代宗教から「アイドル」崇拜まで―」と、二〇一〇年度ゼミ生（卒業予定）海老原昭代さん（題目「現代日本における「王子」像―童話から恋愛シミュレーションゲームまで―」）には心より御礼申し上げます。

④ 初版では実母であった。

⑤ 一九三七年二月二二日に全米公開。日本公開は一九五〇年九月二六日（大映）。製作はウォルト・ディズニー（Walt Disney）。監督はデビット・ハンド（David Hand）。『オフィシャル週刊ディズニー・ドリム・ファイル』第七号（二〇〇九年七月二二日、ディアゴスティーニ・ジャパン）、三一頁。

⑥ 初版では、家来達が白雪姫の棺を運ぶのに疲れ、苛立つて殴ったため、白雪姫の喉からリンゴの芯がとびだし彼女は生き返る。

⑦ 二〇一〇年度東洋大学文学部日本文学文化学科専門科目

「ドイツ語圏文学文化と日本A」（担当者大野寿子）の受講生を対象に、二〇一〇年四月二八日水曜日三限に実施された（実施者海老原昭代）。「王子」のイメージをキーワードで一〇個挙げよ」等の内容であり、被験者二〇二名の回答総数は一八一〇個であった。

男の心と女の心を持つ主人公サファイア王女（王子）のこ  
と。手塚治虫による漫画として、『少女クラブ』版（一九  
五三年一月号～一九五六年一月号）と『なかよし』版（一  
九六三年一月号～一九六六年一〇月号）と『少女フレ  
ンド』版（一九六七年二四～二九号）とがあり、TVアニメ  
化もされた（フジテレビ系で一九六七年四月二日から一九  
六八年四月七日に放映）。

アンケート調査に協力してくれた二〇名の二〇一〇年度大  
野ゼミ生に心より御礼申し上げます。

世界史をモチーフとし、国を擬人化した歴史コメディ漫  
画。「ヘタリア」とは、「ヘタレ」な「イタリア（軍）」と  
いう意味の造語ということである。幻冬舎より出版されア  
ニメ化されている。

ダイアナ・ウィン・ジョーンズのファンタジー小説『魔法  
使いハウルと火の悪魔（ハウルの動く城）』（Howl's Moving  
Castle）を原作とし、二〇〇四年一月二〇日に日本で公開  
されたスタジオジブリ製作（宮崎駿監督）のアニメーション  
映画。

「ヘタレ」の新日本語としての位置づけおよびその語源等  
に関しては、東洋大学文学部日本文学文化学科専任講師木  
村一先生にご教示いただいた。厚く御礼申し上げます。な  
お、文責は筆者にあることを付言しておく。

— おおの ひさこ・文学部准教授 —